

きょう5月12日は「看護の日」



看護の心をみんなの心に

5月12日は
看護の日

看護を通して得た思い出を募集する「忘れられない看護エピソード」。

第4回となる今年は全国から3,422もの作品が寄せられました。
5月10日の表彰式には特別審査委員の内館牧子さんと、ゲスト審査委員で「看護の日」PR大使の蛭原英里さんが登場。
エピソードが披露されると、会場はあたたかな空気に包まれました。

第4回「忘れられない看護エピソード」受賞作発表

5月10日・日本看護協会ビル JNAホール | 主催：厚生労働省、日本看護協会 共催：朝日新聞社

看護部門
最優秀賞

一般部門
最優秀賞

「舞い降りたご主人」

豊崎幸子さん(愛媛県)

その日は日さんとって、人生3度目の手術の日だった。私は、手術の準備をするために日さんの部屋を訪ねた。日さんの表情は穏やかだったが、零泣きから緊張が伝わってきた。ふと私の口から「日さん、離れなげなでねますか」という言葉が飛び出した。「離れなげなでねますか」と、天井を見つめた日さんはつよつかみ、そして、静かに枕元に置いてあったバッグの中を捜し、中から紺色の石のブレスレットを取り出した。

「これ、主人がいつも腕に着けていたんです。それは、すべてです。ぜひ、これを手術に着けて手術室に行きましょう」「手術室の看護師さんからは、何も身に付けて来て下さい、と言われました。いんですか?」「手術室に帰ったのなら外ならないと思いますが、それでは大丈夫です。手術室の看護師には私が話してあげます」

「日さんは「わ、ありがとうございます」。うしろに左手首にそれを着けた。日さんのご主人は先日、急性心筋梗塞で亡くなった。「携帯持った?」「うん、持った。出動するご主人の後ろ姿に語りかけたのが、最後に交わった言葉だったと思う。ご主人はこれでお日さんの手術を全てに付き添い、支えてくださった。日さんにとっては、度重なる手術、それだけでも不安である。それなのに今回は夫として、そばにいてあげることができた。日さんご主人の思いも伝わって来た。手術室に入室した。横になった。体位を整えてから、日さんはブレスレットを外した。「ありがとうございました。日さんの表情は、とても落ち着いておられた。手術室の看護師の配慮で、ご主人のブレスレット、日さんのワタの上の上と置かれた。手術は予定通り終了した。後日、日さんは、麻酔からすっきり目も覚め、気が付いた。すでに左手首にブレスレットを着けておられた。日さん、日さんと置かれた空間に、確かにご主人はいた。

今でも不思議に思う。なぜあの時、突然、離れなげなでねますか?と尋ねたのか。ただ、これほど強い愛の力を感じたことは間違い。私はご主人から、思いを託されたのだと信じた。愛したまま言葉にして伝える。私がついに「はい」で行った。何気ないコミュニケーション。あの時、何も無い自然な空間に、確かにご主人はいた。

「背中をポンポン」

河上知子さん(広島県)

夕食後、息子はお母さん、しんぱんと言ってきた。振り向くと、横になった息子の体が、ゆびと反っていった。次には全身がくわくわく動き、7も8もつけた。処置室から出た息子は、穏やかな笑顔に戻っていた。私は入院することになった。

翌朝、目覚めた息子は、一変した姿を見せた。目覚めた顔や転んで抱いた顔の表情は、昨日の息子と変わらなかった。しかし、私と目を合わせずとも、言葉も失って、ただベッドに横たわっていた。声を掛けると、頭や手足を動かすだけだ。私たちは異常な世界へ放り込まれたのではないかと、目の前の状況を見た。

医師は夫と話していたが「大丈夫だ」といつか病室を去った。その言葉が、私の寂寥の糸を切った。そこから何日経っても、点滴を受け続けている息子の顔をみて、手さすり、食事の介助をし、泣き続けた。泣いても泣いても目が覚めることなく、目が覚めたままもなかった。寝てくるとは顔面と夫に言われて、買ってきたお菓子や飲み物を口にしていた。

その時、私へ声を掛ける人は「な?」と、声を掛けることができなかったのだ。そのとき、息子の背中をポンポンとたたいた人がいた。40歳前後の看護師だった。血圧の測定をして、ポンポン、点滴液を交換して、ポンポン、検査に来て、血圧の測定を、ポンポン、このポンポン、いつの間にか優しい言葉に聞こえていった。反対に、「あなたは母親よ、しかししんぱん」と叱咤の言葉も聞こえた。少しづつ心を落ち着かせた。

あれから32年、36歳になった息子は、元気に障害者施設へ通っている。振り返れば、今までの看護師のポンポンを何度も背中と呼び戻して、生き返ったように思う。



【講師】特別審査委員 内館牧子さん(熊本県)

「忘れられない看護エピソード」朗読動画を公開中

第4回受賞作品の朗読動画を配信中です。YouTubeでもご覧いただけます。

詳しくはこちら
<http://www.nurse.or.jp/home/event/simini/rodoku/>

感動が今年も小冊子に

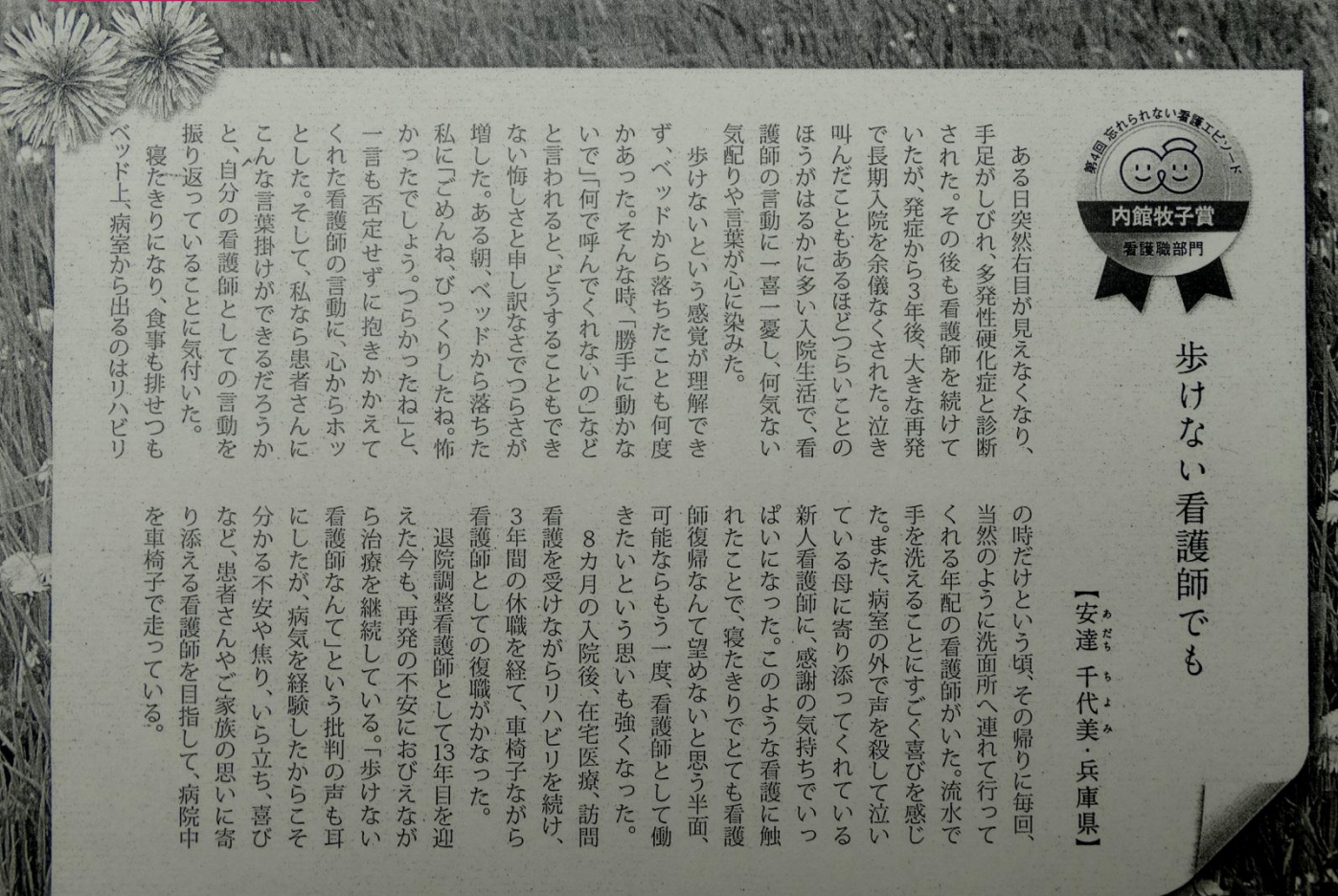
第4回「忘れられない看護エピソード」集 (A5サイズ24ページ) を標準版に差し上げます。

スマホアプリ「忘れられない看護エピソード集」
これからの受賞作品も、手軽にいつでも見るスマホアプリです。
この作品集 第1-4回の看護部門一般部門の受賞作品、朗読音声、無料(iOS/Android)。

6年前に心臓の疾患で倒れ、4ヶ月の入院を経験しました。その時に初めて看護師が患者に対しては大きな「愛」を与える存在なのかを感じました。それがきっかけで、このコーナーの審査員をしています。これも主人の重なり、誇りを感じる作品ばかりです。最後優秀な作品は特に、看護を通じて確々と家裏や仕事の責任、やさしさに寄り添っていたように、社会の士として誇りを持っていただけたように、そしてこの看護の心が広がりように願っています。

「忘れられない看護エピソード」が書籍に「いのち輝く話」
現代の看護現場の中心、より多くの看護職を応援した。発売：河出書房新社 公認監修：日本看護協会(監)

受賞作品を掲載します 本日12日(月)の夕刊から6日間にわたって「忘れられない看護エピソード」受賞作品を広告特集で掲載します。*掲載料は受賞者様へお送りします。



ベッド上、病室から出るのはリハビリを振り返っていることに気付いた。寝たきりになり、食事も排せつも

歩けないという感覚が理解できず、ベッドから落ちたことも何度かあった。そんな時「勝手に動かないで」「何で呼んでくれないの」などと言われると、どうすることもできない悔しさと申し訳なきでつらさが増した。ある朝、ベッドから落ちた私に「ごめんね、びっくりしたね怖かったでしょう。つらかったね」と一言も否定せずに抱きかかえてくれた看護師の言動に、心からホッとした。そして、私なら患者さんこんな言葉掛けができるだろうか、自分の看護師としての言動を振り返っていることに気付いた。

ある日突然右目が見えなくなり、手足がしびれ、多発性硬化症と診断された。その後も看護師を続けていたが、発症から3年後、大きな再発で長期入院を余儀なくされた。泣き叫んだこともあるほどつらいことのほうがはるかに多い入院生活で、看護師の言動に一喜一憂し、何気ない気配りや言葉が心に染みわたった。

第4回「忘れられない看護エピソード」

内館牧子賞

看護職部門

歩けない看護師でも

【安達 千代美・兵庫県】

退院調整看護師として13年目を迎えた今も、再発の不安におびえながら治療を継続している。「歩けない看護師なんて」という批判の声も耳にしたことが、病気を経験したからこその不安や焦り、いら立ち、喜びなど、患者さんやご家族の思いに寄り添える看護師を目指して、病院中を車椅子で走っている。

8カ月の入院後、在宅医療、訪問看護を受けながらリハビリを続け、3年間の休職を経て、車椅子ながら看護師としての復職がかなった。

師復帰なんて望めないと思う半面、可能ならもう一度、看護師として働きたいという思いも強くなった。

の時だけという頃、その帰りに毎回、当然のように洗面所へ連れて行ってくれる年配の看護師がいた。流水で手を洗えることにすごく喜びを感じた。また、病室の外で声を殺して泣いている母に寄り添って泣いている新人看護師に、感謝の気持ちでいっぱいになった。このような看護に触れたことで、寝たきりでとても看護師復帰なんて望めないと思う半面、可能ならもう一度、看護師として働きたいという思いも強くなった。